

強い

まちづくり

— 地域と人と思いをつなぐ —



人口減少で、地方から衰退しつつある日本。地方消滅が懸念されるなか、地域に眠る「資源」の魅力を引き出し、地域を活性化させている人たちがいる。その取り組みから、強いまちづくりのヒントを探る

取材・文 中沢明子

なかざわ・あきこ 1969年東京都生まれ。ライター、出版ディレクター。女性誌、ビジネス誌など幅広い媒体でインタビュー、ルポルタージュ、書評を執筆。企業や自治体によるオウンドメディアのアドバイザーも務める。著書に『埼玉化する日本』（イースト新書）など。

CASE

1



株式会社NOTE

古民家を再生し、 まち全体を宿泊施設に



代表取締役 藤原岳史

地方再生事業「NIPPONIA」を全国で展開する株式会社NOTEは、古民家を活かす「デベロッパージング」なつかしくて、あたらしい、日本の暮らしをつくるという理念のもと、数々の地方再生プロジェクトを手がけ、過疎化したまちをよみがえらせている。

限界集落で

「暮らすように」滞在

古民家の原形を大切に残しつつ、水回りなどは使いやすく今風にリノベーション。モダンでオシャレた雰囲気仕上げたインテリアの宿泊施設や、カフェとして生まれ変わった古

民家が点在する集落に、感度の高い観光客が「暮らすように泊まる」体験を求め、続々と訪れている。

NOTEを率いる藤原岳史さんの出身地は兵庫県丹波篠山市。故郷にほど近い限界集落の丸山で、空き家となった築一五〇年を超える古民家数軒を二〇〇九（平成21）年に再生させたこ

とが端緒となり、本格的にNIPPONIA事業に取り組むようになった。

「前職では東京のITベンチャーに勤めていましたが、会社が上場した〇七年に退社しました。ITは場所を問わずに使えるのに、クライアントの九八%が東京や大阪の企業だったのが疑問で、今後は地方のためにITスキルを活かしたいと思ったんです。僕自身も田舎から都会の大学に入り、就職したわけですが、実家に帰る度に過疎化していく故郷を見る

と、やっぱり寂しくなったんですね。一度離れたことで、自然豊かな故郷の良さもわかるようになりました」

最初は公的施設の管理業務といった役割で、故郷のまちづくりに関わった。知り合いを介して当時の篠山副市長・金野幸雄さんと出会い、共に一般社団法人ノオトの創業に参加。歴史的建造物の保存・活用、調査を行うなかで、限界集落の課題を抱えていた丸山という土地に関わりを持つことになった。